

高齢化と生活文化

坂東 眞理子

1. はじめに

男性の平均寿命が75.9歳、女性のそれが81.8歳となった現在、かつて限られた人のものだった「高齢期をいかに生きるか…」という問いはすべての人にとって切実な課題となりはじめている。

かつて中世文化の背後には「死を忘れるな」(Memento Mori 「メモントモリ」) がリフレーンのように響いていたといわれるが、現在の日本人は「メモントセニア」(高齢を忘れるな) を基調としていかなければならなくなっている。

若い男女が養老保険に入る。就職先を選ぶ際に、退職金や退職後の福利厚生まで気にする学生という現象は、こうした青年たちも長生きするのを当然と考えているからだろう。彼らは高齢になるまえに夭折する方が例外と感じている。老後の生きがいを何にしようというのは定年前のサラリーマンだけではなく、まだ子育てをしている主婦にとっても、毎日長い通勤をしている中年の労働者にとっても切実なテーマである。

高齢社会ではいつの日にかすべての人は老いる。人はいやおうなく、日々老いていく自分と向きあわなければならない。清少納言は「ただ、すぎにすぎゆくもの帆かけたる舟春夏秋冬と人のよわい」といっているが、今これはすべての人の感慨となっている。

2. 歴史の中の高齢期

ところで年齢に対する感覚は、現実とはまったくマッチしなくなっている。平安時代は疫病や出産で若くして亡くなる人が多かったからだだが、30歳でもう長寿を祝う若菜の賀を行っていた。時代は下るが兼好法師が「40に足らぬほどにて死ぬこそめやすかるべけれ」といっているのも、当時は40をすぎると、もう晩年意識、高齢者感覚があったからであろう。平家物語で妓玉・妓女の姉

妹が出家する時、その母の媼も「年老い齢衰たる母白髪をつけても何にかわせむ」と娘たちと共に出家しているが、その彼女はかぞえで45歳にすぎない。もっとも女性にとって年齢は男性より苛酷だったようで、梁塵秘抄にも「女のさかりは、14, 5, 6, 7, 8とかや、20歳すぎれば紅葉の下葉にことならず」とうたわれている。栄華物語でも21, 2歳の妍姿を「さだすぎたる齢にはあわしますれど…」と盛りはすぎてもなお美しいという描写も見られ、女性の美しさは、10代後半がピークで、20歳になると衰えだすとされていたようである。江戸時代の「娘18番茶も出花」という俗謡までこの流れは続いている。

これは平均寿命が短かく、当時体力も弱かった当時の人々は衰弱するのも速かった。子孫を残すためには10代のうちに結婚し出産してもらわなければならなかったからであろう。平安時代の平均寿命は20歳すぎ、1600年頃でせいぜい30歳程度、1891~98年と明治も半ばによく男性42.8歳(松浦公一氏によれば37.1歳)に達するのである。

このような時代において長寿を保てるのはきわめて恵まれたほんの一握りの人々であり、「老」と敬われ、大切に扱われるのは当然だった。それでも貧しい庶民の間で語りつがれた姥捨伝説のように、年とった女性(せいぜい50歳になったかならずか)は、若い者に負担にならないようにしなければならなかった。

したがって、高齢者の生活文化は、集団として存在することはなく、一部の恵まれた層の恵まれた個人が享受してきたといえる。もっとも主観的には3, 40歳でも自分を老人と思ひ、晩年だと思っていた人々(たとえば兼好、芭蕉、千利休)は多く、日本文化の主流を担ってきたともいえる。

3. 現在の高齢者の生活

① 増える夫婦世帯

いずれにしても、現在のように大量の高齢者が存在し、しかもその人々が経済的にも、身体的にも、また教育水準の上でもレベルは高くなり、大きな影響力をもち

表 1 世帯の家族類型別65歳以上親族のいる一般世帯の推移

世帯の家族類型	65歳以上親族のいる一般世帯数			割合 (%)		
	昭和55年	昭和60年	平成2年	昭和55年	昭和60年	平成2年
65歳以上親族のいる一般世帯数	8,124,354	9,283,983	10,729,464	100.0 (22.7)	100.0 (24.4)	100.0 (26.4)
親族世帯	7,231,728	8,091,938	9,095,766	89.0	87.2	84.8
核家族世帯	2,331,463	2,901,743	3,800,641	28.7	31.3	35.4
うち夫婦のみの世帯	1,272,533	1,651,124	2,217,875	15.7	17.8	20.7
その他の親族世帯	4,900,265	5,190,195	5,295,125	60.3	55.9	49.4
非親族世帯	11,132	11,322	10,265	0.1	0.1	0.1
単独世帯	881,494	1,180,723	1,623,433	10.9	12.7	15.1
(再掲) 3世代世帯	3,811,205	3,959,346	3,904,404	46.9	42.6	36.4
65歳以上親族のいる一般世帯人員	31,944,040	34,627,732	37,192,403	27.7	29.0	30.6
うち夫婦のみの世帯人員	2,556,126	3,311,362	4,443,308	2.2	2.8	3.7
65歳以上親族人員	10,242,486	11,924,087	14,233,415	8.9	10.0	11.7
うち夫婦のみの世帯人員	1,922,716	2,564,600	3,589,869	1.7	2.1	3.0
うち75歳以上親族人員	—	—	5,511,863	—	—	4.5
うち夫婦のみの世帯人員	—	—	904,291	—	—	0.7
うち単独世帯人員	—	—	639,563	—	—	0.5

注) () 内の数値は、一般世帯に占める65歳以上の親族のいる一般世帯数の割合
65歳以上親族のいる一般世帯人員および65歳以上親族人員の割合は、一般世帯人員に占める割合

表 2 65歳以上親族のいる一般世帯の持ち家率

世帯の区分	平成2年		昭和60年	
	持ち家世帯数	持ち家率 (%)	持ち家世帯数	持ち家率 (%)
一般世帯	24,059,950	59.2	22,616,840	59.5
65歳以上親族のいる一般世帯	9,147,730	85.3	7,932,620	85.4
65歳以上親族のいない一般世帯	14,912,220	49.8	14,684,220	51.2

はじめたのは日本の歴史はじまって以来、はじめてであり、先進諸国でもせいぜい数十年の現象である。

ここで、日本の高齢者がどのような生活をしているかみてみよう。

最新の国勢調査の結果によれば、65歳以上の親族のいる世帯は1072万9千世帯だが、そのうち子、孫からなるいわゆる3世代世帯は36.4%で、夫婦のみの世帯が20.7%、単独世帯が15.1%となっている。日本の高齢者といえば孫や子と3世代でと考えられがちだが、近年急速に増えているのは、子供たちが独立したあと夫婦だけで生活している高齢者や単独で生活している高齢者である。福祉サービスや子供たちの世話にならず、自立して生活できる高齢者が増加していることの反映である。またそれに拍車をかけたのが東京への一極集中であり、人口の地域間移動である。子供たちは親から離れて大都市圏に

住むようになってきている。

② 増える一病息災高齢者

人々が長生きするようになったということは、それだけ健康で体力がついているということである。年齢別の有病率をみると、65歳以上の者の64.4%が何らかの傷病ありだが、その8割以上は通院者で、入院したり日常的に就床状態にある者はそれぞれ5%、3%程度にとどまっている。高血圧、心臓疾患、リウマチなど慢性的の病気をかかえ月に2~4回通院し、投薬を受けているという高齢者が一番多い。これらの日々は日常生活には支障がなく、程度の差はあれ、仕事や多様な活動は可能であり、また65歳以上でも34.4%は「傷病なし」である。

一方、手厚い介護を要するねたきり老人の出現率は65~74歳で0.7%、75歳以上で3.5%ときわめて少ない。ほとんどの高齢者は少なくとも70代半ばまでは、まだまだ

だ健康だといえるだろう。

③ 低下する就業率

このように、健康な高齢者が増加しているにもかかわらず、高齢者の就業率は決して高くない。65歳以上の就業者は357万人で就業率は28.3%にとどまっている。就業者のうちでは自営業主、家族従業者の割合が大きく、農林業就業者の28.2%は65歳以上であるが、製造業などでは3%そこそこにとどまっている。

このように働く高齢者が少なく、またボランティア活動などに従事する人も少ない。

④ 高齢者の経済状態

高齢者の経済状態も決して悪くはない。

フロー、月々の収入はたしかに多くはないが、世帯主60歳以上の世帯の実収入は469,244円、消費支出は346,465円である。50歳代より落ちるものの、世帯人数も減っており、教育支出や食費も少ないので黒字が122,779円もある。無職の高齢者世帯は社会保障給付が主たる収入源で赤字になっているが、それでも月々45,118円である。さらにこうした高齢者はストックの面ではフロー以上に恵まれている。

貯蓄動向調査によれば、高齢者世帯の金融資産は2210万円、全勤労者世帯平均の1051万円の約2倍である。また住宅所有率も高い。金融、実物資産とも若い世代よりゆとりがあるといえよう。

⑤ 長い自由裁量時間

また高齢者は時間にも恵まれている。職業から引退した高齢者は、自分の自由に使える時間をたっぷりもっている。年金や貯蓄をもち、食べるための勤労から解放された高齢者は“新しい貴族”といえる。

このように長くなった自由裁量時間は、高齢者が新たな

生活文化をうみ出す上で重要な資源である。

高齢者は長い自由裁量時間をさまざまに活用している。60歳代は学習、研究、スポーツ、旅行などを青・壮年者と同じように行っている。

男性では芸術、文化の学習・研究をしている割合は60歳代前半でどの年代よりもっとも高い。おそらく退職を機に新たに学習・研究をスタートする人々が多いからであろう。

女性は4、50歳代から、趣味や地域活動をしているので急に増えるということはない。男性はスポーツをより盛んに楽しんでいるのに比べ、女性は趣味や学習・研究をしている者が多い。

4. 高齢社会の衣食住

それでは今後、高齢者はどのような生活文化をうむ可能性があるのだろうか。現在の状況から将来への展望を各分野別に概観してみよう。

まず生活の必需的な分野である衣食住についてみてみよう。衣生活については現在の高齢者はほとんど和服離れをし、男性も女性も洋服を日常着としている。しかし、かつての和服では着こなし材質などで高齢者の体型をカバーし、品格と美しさを表現できた高齢者も、洋服についてはまだそのレベルに達していない。保温性や着脱の容易さ、体が動かしやすいという機能性と美しさと品位を兼ねた衣類はまだあらわれていない。高齢者自身“高齢者向け”と銘うたれたものを好まないという心理に配慮しつつ、もっとおしゃれを楽しみたいという高齢者の希望に応える必要がある。

高齢者の食事は伝統型で、家庭で調理したものを好み、食事の内容は肉類よりも、魚介類や野菜が多い。高齢者の健康のためには高たんぱく質、低カロリー、低塩で、野菜など食品の種類の多いバランスのとれた食事が望ましいといわれるが、日本人の高齢者の食事は、カルシウムが少ないことと、塩分が多いことを除けば理想に近いといわれる。今後は1人暮らしや、夫婦のみで生活する高齢者がふえるので、外食産業も高齢向けのメニューを用意すれば需要が高まるだろう。

料理の手間を省く調理食品（弁当やファーストフードなど）も、今は主として食欲の旺盛な若者向きである。

高齢者向け、シルバーメニューなどという魅力は乏しいが、健康によい、肥満防止、血圧コントロールという点をアピールすれば抵抗なく受け入れられるだろう。

住生活も今大きな転換点にたっている。現在の高齢者

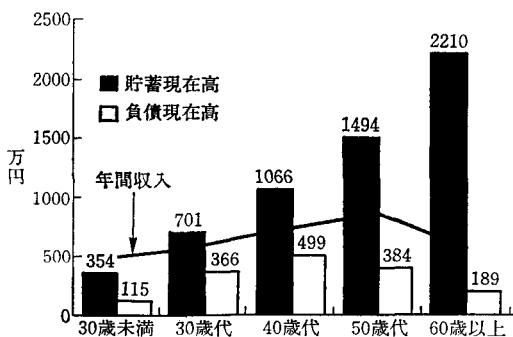


図1 2人以上の普通世帯の年齢階級別貯蓄・負債の現在高（平成2年12月末現在）（全国・全世帯）

資料：「貯蓄動向調査」

は地方在住者が多く、住みなれた持家に住んでいるが、そうした家は体が不自由になった高齢者が生活しやすいような設備は整えられていない。手すりのついた風呂、階段、しきいのない間仕切りがあれば、自立して生活できる期間は長くなるといわれる。車椅子が屋内で使用できる家が多い欧米で寝たきり高齢者が少ないことをみても、高齢者が生活しやすい家というのはぜひ必要だろう。嫁や妻の涙で世話されるより、道具や設備を使いこなして自立して生活できる方が、高齢者にとっても幸福である。高齢者向けの設備をととのえた集合住宅への需要も高齢社会へ向けて大きくなっていく。高齢者にとって住みやすい。

5. 高齢者の生活文化

高齢者の生活文化として今後発展が予想されるのは、趣味、学習、スポーツ、旅行などの余暇活動である。働きすぎと批判される日本人も、60歳代以降の退職者が増え、余暇時間が飛躍的に増える。特に男性の場合は退職すると、生きがい喪失になりがちである。

手に職のあるブルーカラーの労働者や専門職のプロは別として、普通のサラリーマンは、退職したとたん会社や肩書きに付随していた情報も敬意も交友も失ってしまう。

そのため「できるだけ長く働きたい」と望む日本人も多いが、雇用者化が進む中で高齢者の労働力率は前にみたとおり低下傾向にある。仕事以外に自分の能力を発揮

表 3 得意とする趣味、スポーツの有無

	該当者数	あ	る	な	い
総数 〔学歴〕	2,376人	26.8%		73.2%	
小卒	264	12.9		87.1	
旧高小・新中卒	1,071	22.1		77.9	
旧中・新高卒	791	33.4		66.6	
旧高専・大卒	227	44.1		55.9	

(出所:「実年にする世論調査」1986)

する機会としては、欧米ではボランティア活動、教会活動が活発に行なわれているが、日本ではそうした基盤がなく、趣味と旅行が盛んである。また最近では生涯学習として、多様な学習機会が整備され、そこで学ぶ高齢者も増加している。

ところで、学習することはそれ自体が喜びであるといわれるが、人間は学んだことを発表したい、教えたという欲求ももつ。現在の生涯学習の最大の欠点は、学んだことを生かす場、発揮する場がないことである。その点、従来の古い型の趣味習い事は学ぶとともに発揮する機会もビルトインされている。

たとえば、空前の繁栄をみせる俳句も多くの結社は同人誌をもち、句会、吟行などの交流の場、発表の場もっている。華道や茶道も長く続けていると、次々と新しい免状がとれ、他人に教えることもできるというたくみな制度となっている。新しい家元制度というべきアート

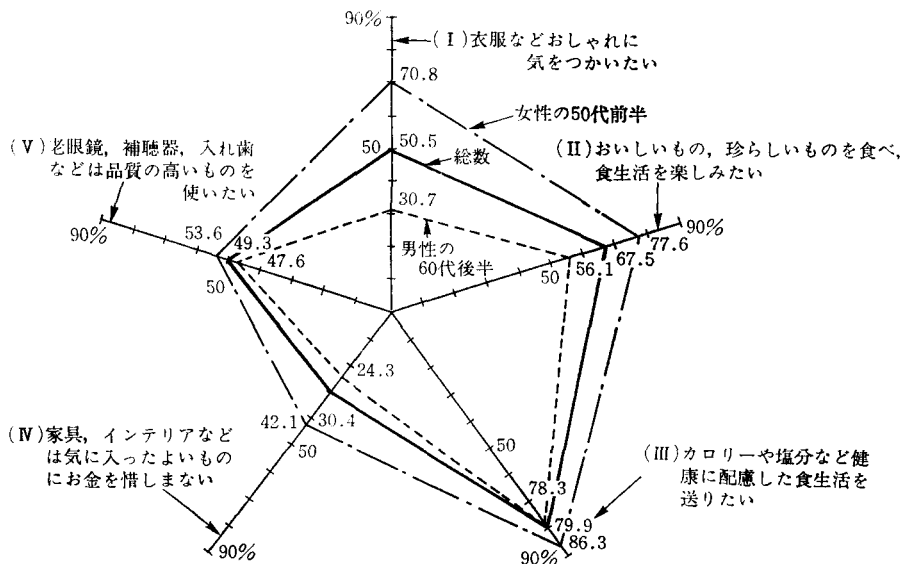


図 2 今後の生活で行ないたいこと (「そうしたいと思う」と答えた者の割合)

資料:「実年に関する世論調査」1986年

表4 高齢者の余暇活動(%)

		日本			アメリカ			イギリス		韓国		ドイツ
		第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第3回	第1回	第3回	第1回	第3回	
宗教活動	いつも参加している	5.6	5.0	6.7	39.7	43.1	54.8	23.4	24.7	16.3	25.2	16.0
	ときどき参加している	7.5	6.1	11.7	23.4	21.2	19.6	14.4	13.7	16.9	15.2	22.8
	たまにしか参加していない	6.6	6.8	12.0	13.0	12.4	10.6	11.3	15.3	9.7	11.0	27.1
	まったく参加していない	75.2	78.8	68.0	23.9	23.1	14.4	50.4	46.1	57.1	48.5	33.7
社会的な集い	いつも参加している	2.0	1.9	4.5	35.2	40.5	23.0	23.5	28.0	11.1	11.7	22.5
	ときどき参加している	4.2	3.2	10.6	32.7	32.3	37.0	20.0	25.0	15.2	17.7	40.8
	たまにしか参加していない	3.6	4.1	11.4	14.0	11.3	23.1	8.9	17.3	6.9	10.1	24.6
	まったく参加していない	83.9	87.2	71.7	18.1	15.4	16.1	46.2	29.7	66.7	60.5	12.0
地域でのボランティア活動	いつも参加している	7.9	7.2	12.4	14.4	16.8	18.8	8.0	11.5	6.9	12.0	6.4
	ときどき参加している	6.5	7.8	14.9	15.2	17.4	20.3	5.3	7.9	8.7	16.0	15.1
	たまにしか参加していない	5.7	7.3	17.1	11.4	9.7	18.5	2.4	9.3	7.8	12.2	18.5
	まったく参加していない	74.6	74.7	54.2	58.7	55.5	41.3	81.9	71.1	76.3	59.8	59.2
老グループ活動	いつも参加している	14.8	11.0	11.5	21.6	20.1	19.7	7.0	11.0	21.0	21.8	7.6
	ときどき参加している	9.9	10.7	13.0	11.0	12.3	15.8	2.7	6.8	8.3	9.5	12.8
	たまにしか参加していない	7.8	9.6	14.3	8.4	9.4	13.6	1.3	6.8	4.6	7.7	16.5
	まったく参加していない	62.7	66.6	59.7	59.0	57.8	50.1	87.0	75.4	65.7	60.9	62.5

(出所:「老人の生活と意識に関する国際比較調査」)

フラワーや楽器、語学などこうした“習い事”がこれからの高齢社会でも支持され続けることが想像される。

このほか健康重視から、軽いスポーツも盛んになっている。ゲートボール人口は約300万人ともいわれるが、チームプレーで、あまり過激でなく友人との交流に結びつくという点で日本人から好まれる条件を備えている。しかし、あまりファッションブルでない高齢者のスポーツというイメージが定着しているのが問題である。その点、今後はゴルフが高齢者のスポーツとして定着する可能性が高い。

旅行も時間に恵まれた高齢者の参加が増える。旅行は他の趣味活動と異なり、体力や技術が必要でなく、経験のない人でも容易に行なえる。退職記念や古稀記念に経済的にゆとりのある旅行をする高齢者もふえつつある。

趣味やスポーツについては、現在の5、60歳代のもて級、段位、資格などをもっていたり、発表会、展覧会、競技会などに参加するような得意とする趣味やスポーツ

があるという者は26.8%で、男性の方がやや多い。

なかでも、表3にみるとおり、学歴の高い者は経済的、時間的に恵まれているためもあるのか、得意な趣味、スポーツが多い。今後は若い時からゆとりをもち、こうした素養を身につけた高齢者がふえると思われる。

高齢者の家計支出で目立って多いのは交際費である。高齢になり人間関係が広がり、義務的に支出せざるを得ないという事情もあるかもしれないが、高齢者が人々とのつながりを求め、人間関係を大事にしようとするため交際費支出が多いのであろう。

共通の経験と思い出をもつ同窓会、同期会の類が多くなるのもこの時期である。また離れて住む子や孫へのギフトも多くなる。現在も雛人形、五月人形、七五三衣裳、入学用のランドセル、机、洋服などのスポンサーは祖父母だといわれる。伝統文化をギフトという形で若い世代に伝えるにあたって高齢者が果たす役割は大きい。

さらには葬式、偲ぶ会といった儀式、自伝、自分史、

家系図などを残したいと願う高齢者も増えている。これらを自費出版し、親族・友人に配布するのを助けるビジネスもさかんである。

職業人として働いている間は、こうした文化活動と無縁になりがちだった日本の男性も退職すると変化する。特に今後は、経済的必要から働らかざるを得ない高齢者は減り、また学歴の高い都市部でサラリーマンとして生活をしてきた人が増えるので、高齢者の文化活動はさかんに増えていくだろう。

従来、高齢者の文化・余暇活動は男性と女性ではっきりわかれていた。たとえば囲碁、将棋、麻雀、ゴルフは男性、短歌、謡曲、華道など文化的習い事は女性という色彩が強かったが、ゴルフを楽しむ女性、俳句や茶道、絵画などを楽しむ男性が少しずつ増加している。

日本の高齢者の余暇活動を諸外国と比較してみると、欧米に比べ、宗教活動、社交的なつどい、ボランティア活動のいずれも参加率が低い。なかでは老人クラブなどのグループ活動への参加率が高い。

韓国も欧米よりこうした活動への参加率は低いが、それでも宗教活動、社交的な集いなど日本よりは高くなっている。

日本の高齢者も最近ボランティア活動への参加が増加しはじめているが、アメリカの高齢者などと比べるとその差は大きい。

6. 生活文化の新しい広がり

問題は現在の日本の社会の風潮を反映して、高齢者の文化活動、余暇活動も、自分の楽しみ中心、自分の健康中心、自分のレベルアップ中心のものに集中し、社会への貢献や働きかけが少ないことである。

高齢者＝隠居は、自分のことだけしていればよい、御身御大切に、無理をしないのがよい、周囲に迷惑をかけるのが一番という美意識（規範）が強い。

それも1つのあり方だが、もっと「若い世代に自らのもつ知恵や技術を伝えよう」とか、「よりよい社会を後世のために残そう」という気概、意欲をもたないと、単に高齢者の文化活動は、自己満足に終わってしまうおそれが強い。

多くの人が長寿を与えられ、それだけ体力もあるはずなのに、1世代前、2世代前の高齢期のすごし方のイメージにとらわれて、自己満足的な趣味に終わってしまうものは足りない。

それよりも、隠居後、天文学・測量学を初歩から学び、前人未踏の日本地図の完成という大仕事を完成させた伊能忠敬、70歳、80歳をすぎても創作力にあふれ、過去の自分のスタイルにとらわれることなく、新しい画境に挑戦し続けた葛飾北斎、パブロ・ピカソのような高齢者が増えてこそ、高齢社会の生活文化が花開く。

現代の貴族というべき高齢者の創り出す生活文化の可能性を期待して筆をおこう。

表紙のデザインを公募します

このたび、オペレーションズ・リサーチ学会では、「オペレーションズ・リサーチ」誌の表紙デザインを公募することになりました。現在の表紙は、高井英造氏によるもので、1987年より毎年色を変えながら皆様に親しまれてまいりましたが、すでに6年目を迎えました。そこで、このあたりで表紙のデザインを変えて気分を一新したいと思えます。ORの未来を切り開くような斬新なイメージの作品を募集します。皆様ふるってご応募ください。

<記>

応募資格：本学会正会員および学生会員、賛助会員の社員

締切：1992年8月31日

発表：本誌紙上

賞金：10万円

大きさ：B5判

その他：①現在の表紙に記載されている文言を入れられるようにして下さい。

②3色刷り（1色はスミ色）で主たる色（2色）を変更できるようにして下さい。

③使用にあたっては、技術上の修正をすることがあります。

④著作権は学会に帰属し、応募作品は返却いたしません。（編集委員会）